

## 「聖霊の実力」

牧師が、礼拝の最後に行う「祝祷」というお祈り。これには、参考となる言い回しや聖句は紹介されていますが、これという決まった定型句はありません。ただ、多くの牧師が「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の親しき交わりが～」という、コリントの信徒への手紙二 13 章 13 節から取られた文言を語っています。私の場合は、この文言に、もう一つ聖句を加えて祝祷を行っています。だいたい、牧師はそんな感じで祝祷という祈りを捧げています。ただ、子どもの礼拝となると、ほかの牧師がどんな祝祷をしているのか、実はよく分かりません。それは単純に、牧師同士がなかなか教会学校の礼拝とか、幼稚園の礼拝とかに出席できないという事情からだと思います。大人の礼拝と同じ祝祷を行う牧師もいるでしょうし、そもそも子どもの理解水準に合わせて、祝祷というものを省いている牧師もいるかも知れません。私は、自己満足かも知れないと思いつつ、子ども用の祝祷をしています。こんな感じです。「イエス様の豊かな恵み、神様の優しい愛、そして聖霊さんたちの元気な力がありますように」と。ただ、この言い回しも、違和感が残ってしまっていて、イエス様、神様と「様」付けで呼んでおいて、聖霊だけ「さん」付けなのは、自分で納得しているわけではありません。けれど、イエス様と神様に寄せて、「聖霊様の元気な力が」と言うのは、個人的ななんだかしっくり来なくてですね。だからと言って、聖霊さんという「さん」付けに合わせて、イエスさん、神さんというのは、論外なわけで。地味に思えて、これは私にとってかなり難しい課題です。あと、本来は「聖霊の親しき交わり」という部分を、「聖霊さんの元気な力」と言い換えていますので、これはかなり意味が違ってきます。どうしても、子ども達に「聖霊の豊かな交

わり」の意味を分かりやすく伝えることができなくて、大胆に言い換えてみたわけです。なんとなく、「聖霊さんって、元気をくれる良いやつなんだな」と子ども達が受け止めてくれたらいいのかな、と。聖霊という存在は、神学的に正しく定義されているとしても、それを誰にでも分かりやすく説明できるかと言われると、私はまだまだ力不足だと思わされます。

ペンテコステは、キリスト教の三大祭日の一つです。イースター、クリスマスに並ぶ喜ばしい祝日です。しかし、やっぱり、ほかの2つに比べたら、ペンテコステの知名度は低く、地味な感じは否めません。私は、ペンテコステに洗礼を受けたので、もっとペンテコステの地位向上をすべきと思っていますが、簡単にはいかなさそうです。ただ、これは私の個人的な考えですが、日本における。このペンテコステの知名度の低さは、そのままキリスト教の知名度の低さなのだと思います。クリスマスやイースターは、たまたま近現代の日本において、商業的に魅力に見える特徴を備えていただけて、教会が努力して、その知名度を上げたわけではありません。周りから勝手に寄ってきて、勝手に広めてくれただけのことです。一方で、ペンテコステは、非キリスト教にとっては、何の魅力もないがゆえに、この日本におけるキリスト教の本当の実力を示していると言えるでしょう。ペンテコステの魅力は、誰かに気付いてもらうのを待つのではなく、私たちの方から積極的に発信し、知ってもらう必要があるのだと私は思います。

実は、ペンテコステとは「積極的に発信する」ということの記念日でもあります。言い換えるなら、「大きな声で話し出した」記念日。「わたしの言葉に耳を傾けてください」と叫んだ記念日です。これは、イエス様のご降誕、イエス様のご復活に匹敵する、素晴らしい出来事です。あの不出来で、主の十字架を前にして逃げ出した、あのペトロと弟子たちが聖霊の力を受けて「声を張り上げ、話し始めた」。これが、ペンテコステの重要な出来事であり、聖霊の実力が示された瞬間でもありま

す。ということで、今から、私たちは、いかにペトロを始めとした、弟子たちが頼りなく、勘違いばかりで、疑い深さを抱えていたかを振り返ってみたいと思います。そして、そんな彼らが、イエス様を天に見送った後、イエス様の陰に隠れることのできない状況で、「わたしの言葉に耳を傾けてください」と叫んだ、その事実と驚きを味わいたいと思います。聖霊が降ると、本当にすごいことが起こるんだ、と私たちは知っていたと思います。では、まずはペトロたちが、イエス様と会う場面から。

ルカによる福音書5章1～11節には、シモンと呼ばれていたペトロのところを訪れるイエス様が語られています。漁師であったペトロは、漁に出て欲しいと願うイエス様に向かって「先生、わたしたちは夜通し苦労しましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と言ったんですね。なんとなく、険のある言い方だと私は思いました。「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう、まあ、何も取れないと思いますが」というような。ペトロは、出会った瞬間からイエス様を信頼していたわけではなく、その初対面の時は、普通に訝しんでいた、ということです。それは、この現代日本において、初めてキリスト教に触れる人たちが感じる「怪しい」という感覚と似ていたのかも知れません。でも、まあ、初めましての間柄なら、そう感じる事が、むしろ正常と言えるでしょう。では、次にマルコによる福音書4章35～41節。ここでは突風の吹く中で、船に揺られているイエス様一行のことが書かれています。船が波を被って水浸しになる、そんな状況で弟子たちは慌てふためいて、イエス様に助けを求めます。「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」。しかし、イエス様は、その時、眠っていたんだと言います。弟子たちに無理やり起こされて、一言「黙れ、静まれ」と言うと、すっかり風は止んだと言います。そして、イエス様はさらに一言「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」。こんな風に、

イエス様の一番近くにいる弟子たちは、いつもイエス様に叱られてばかりだったんですね。続きまして、マタイによる福音書 16 章 13～20 節。ここは珍しく、ペトロがイエス様に褒められる場面です。イエス様は、弟子たちに向かって、「人々は自分のことを何と呼んでいるのか」と質問されました。弟子たちは、「洗礼者ヨハネと言っています」とか「エリヤだと言っています」とか答えました。イエス様は、それを聞いて、さらに「じゃあ、あなたがたは、わたしのことを何者だと思えるのか」と尋ねられました。ペトロは、この問い掛けに「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えました。これは、非常に大正解です。イエス様もこの答えを聞いて、ペトロに特別な「天の国の鍵」を授けたと書かれています。しかし、ここでせつかく褒められたペトロさんですが、直後の 21～28 節において、こっぴどくイエス様に叱られることとなります。イエス様が、ご自身の死と復活を予告して言われたのを聞いて、ペトロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」と意見したんですね。しかも、人目を憚るようにイエス様をわきに連れて行って、そう言ったのです。すると、イエス様は「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者」と言って、かなり激しい口調でペトロを叱りました。悪魔呼ばわりされたペトロさんの気持ち。悲しかったと思います。続いて、マルコによる福音書 9 章 33～37 節まで。ここで弟子たちは、イエス様に聞こえないように、あることを議論していました。その「あること」とは、自分たちの誰が一番偉いのか、という非常に低俗なお話です。しかも、その低俗さを弟子たちも理解していたようで、「何を議論しているのか」というイエス様の問い掛けに対しては黙って答えようとしませんでした。ただ、イエス様にはすべてお見通しで、ここでも叱られてしまうこととなります。そして、弟子たちのイエス様に対する裏切りが最も顕著に表れる「三度の否認」が起こります。まず、ヨハネによる福音書 13 章 36～38 節において、イエス様はペトロがご自分から離れていくことを予告し

ます。「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うであろう」と。ちなみに、この予告の際に、ペトロは「あなたのためなら命を捨てます」とイエス様に伝えています。しかし、その後の顛末は、有名となっている通りです。ヨハネによる福音書 18 章 15～18 節において、ペトロは一度目の否認をします。目撃者からの「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか」という問いに対して、一言「違う」と答えました。そして、同じく 18 章 25～27 節において、立て続けに 2 度、否認しました。そこで、鶏が鳴きました。ちなみに、この「三度の否認」の並行箇所であるマタイによる福音書 26 章 69～75 節では、ペトロは「呪い言葉さえ口にしながら、そんな人は知らない」と誓い始めた」と書かれています。イエス様に「あなたのためなら命を捨てます」と言ったペトロは、主の十字架を前にして、どうしてもその恐怖に耐えることができなかったのです。この「三度の否認」が、ペトロを始めとした弟子たちの疑い惑いの最高潮と思えますが、実際は、イエス様のご復活の後も、弟子たちの疑い惑いは続いていきます。ヨハネによる福音書が伝える「イエス様の脇腹の傷に指を入れたいと言った疑い深いトマス」の話、ルカによる福音書が伝える「信じきれない弟子たちを安心させるために、焼いた魚を食べて亡霊ではないことを証明するイエス様」の話、マルコによる福音書が伝える「弟子たちの、なおも続く不信仰とかたくなな心をお咎めになったイエス様」の話、マタイによる福音書が伝える「イエス様の大宣教命令を受け取る弟子たちの中にも、なお疑う者がいたという事実」の話。というように、イエス様と出会ったからといって、そして、イエス様の十字架と復活を経ても、まったく頼もしい信仰者とはなれなかった弟子たちがいたのです。それは、もしかたしたら、洗礼を受けてなお、怖気づき、自信を持たず、神様とイエス様のお守りを信じきれない、私たちの姿とも重なるのかも知れません。ヘブライ人への手紙 4 章 16 節にあるように「だから、憐みを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けを頂く

ために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」という、非常に有難い励ましを受け取りながら、なかなか、そのように大胆にはなれない私たちがいます。人にも遠慮をし、神様にも遠慮をする、私たちがいます。

きっと、聖霊は、そんな私たちを変えるために、天から降ってくるのだと思います。使徒言行録 1 章 8 節にあるイエス様の御言葉「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」。弟子たちも、私たちも、聖霊が降ると、力を受けるのです。そして、その非常に明らかな決定的瞬間が、今日の聖書箇所なのです。あんなにダメダメで、失敗ばかりで、叱られてばかりで、復活のイエス様を受け入れることにさえ難儀した弟子たちが、大群衆を前にして立ち上がり、主の福音を語り出す。「すると、ペトロは 11 人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。ユダヤの方々、またエルサレムに住む全ての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください」。

冒頭、私は祝祷の中にある「聖霊の親しい交わり」を、子ども向けに「聖霊さんたちの元気な力」と言い換えていると話しましたが、この言い換えは、それほどの外れでもない、という気がしますよね。聖霊さんにとって、弟子たちも、私たちも元気な力を受けるのです。そして、自信と確信をもって語り出すことができる。事実、そういう大きな声で福音を述べ伝える人たちがいたら、教会は立ち上がり、私たちは、この整えられた礼拝堂でペンテコステの礼拝を守っています。ペンテコステは、やっぱり教会の誕生日というわけですね。私たちも、聖霊の力を受け取ることで、新しい一歩を、新しい一言を生み出せるのかも知れません。たとえ、その一歩や、一言は小さくても、そこから始まる良き業と、良き知らせが、きっとあるでしょう。聖霊の実力は本物です。そして、そんな聖霊に満たされている私たちの力は侮れません。ペンテコステの今日、私たちは聖霊の実力を

知って、信仰と確信を胸に、それぞれの場所へと新しく派遣されていきましょう。行く先々できつと、福音が広がっていく幸いを見ることができると私は信じています。お祈りを致します。

神様。今日も、私たちの上に、豊かな聖霊を注いでくださり、感謝致します。かつて、聖霊に満たされて、大きな一歩を踏み出した、主の弟子たちがいました。彼らの信仰的成長には、本当に驚かされます。聖霊の実力のすごさを思います。どうか、神様、今まさに、主のために御言葉を伝え、主のために良き業をなそうとする私たち一人一人のことを顧みて、かつて弟子たちに勝るとも劣らない、豊かな聖霊をお与えください。ペンテコステの今日から始まる、教会の新しい1日1日が、あなたの御守りと私たちの信仰によって、楽しく賑やかに彩られますように。聖霊の親しい交わりを通して、みなが健やかに笑顔で過ごすことができますように。導いてください。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

6月召天者を憶える祈り 詩編 33 編 12～15 節

いかに幸いなことか／主を神とする国／主が嗣業として選ばれた民は。

主は天から見渡し／人の子らをひとりひとり御覧になり

御座を置かれた所から／地に住むすべての人に目を留められる。

人の心をすべて造られた主は／彼らの業をことごとく見分けられる。

井上諭吉兄 いのうえ ゆきち けい (1991年6月8日)

源田きさ姉 げんだ きさ し (1985年6月12日)

橋本恵子姉 はしもと けいこ し (2014年6月12日)

野村芳枝姉 のむら よしえ し (2002年6月13日)

千波晴子姉 ちば はるこ し (1988年6月23日)

木下美邑姉 きのした みう し (2007年6月28日)

神様。私たちは今、あなたの知られざる御心によって、先に天へと召されし、6月の召天者の方々のことを憶えて、祈りを合わせています。信仰の先達のことを祈りに憶える時、私たちの想いは、この地上を離れ、はるかあなたの住まう天上へと及びます。今は、あなたの御腕に抱かれてとこしえの平安に内に憩うておられる方々に想いを馳せながら、いずれ来る再会の日を待ち望みます。この6月に召された方々と、未だ地上を生きる私たちとは、今は離れ離れに時を過ごしていますが、終わりの日には、あなたの御前において、再び相まみえることになるかと信じます。その来る日を目指して、私たちはあなたによって与えられた命を精一杯に燃やしつつ、主の民として相応しい生き様を示してゆくことができますように、あなたが導いてください。また、在りし日の方々の姿を心に浮かべることで励まされ、その信仰を受け継ぎ、次代へと伝えていくことができますように切に願います。天の上には限りない平安が、地の上には進むべき標と力強いお支えがありますように。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。